

O1-031

「慢性疾患を抱える子どもの自立」の概念分析

瀬尾 真千子¹、田村 敦子²、小林 京子³¹聖路加国際大学大学院看護学研究科 博士後期課程²自治医科大学看護学部 小児看護学³聖路加国際大学大学院看護学研究科 小児看護学

【目的】

慢性疾患を抱えて生活している子どもたちが早期から自立できるように支援している一方で、慢性疾患を抱えている子どもにとっての「自立」の性質は曖昧または定義されていない文献が多い。したがって、本研究では慢性疾患を抱えている子どもの自立の概念分析を行い、定義をし、自立支援の一助とすることを目的とする。

【方法】

Rodgers (2000) の概念分析の方法に則り、概念の性質について分析を行った。看護学領域の文献を医中誌で2008年から2017年の10年間の原著のみとし、「自立」「子ども」「乳児期」「幼児期」「思春期」「青年期」「小児」「慢性疾患」のキーワードを掛け合わせ検索を行った。取り込み基準は、1) 治療、処置に関係しない、2) テーマの主体が小児である、3) 発達障害、重症心身障害児ではない、4) きょうだいではない、5) 虐待ケースではない、6) 精神疾患ではない、として2人で絞込み、国内文献34本を分析対象とした。文献シートを作成し、文脈と併せて属性、先行要因、帰結を抽出し、小児看護の研究者と一緒に内容の分析を行った。

【結果】

国内文献34本の分析結果とし、【成長発達】は属性、先行要因、帰結の全てにおいて、前提の条件付けに位置付いた。慢性疾患を抱えた子どもの自立の属性は【意思決定】、【病気の受け入れ】、【病気と共に生きる】の3つ、先行要因は【支援】、【病気について知る】、【突きつけられる状況への直面化】の3つ、帰結は【見通し力】、【病気を抱える】の2つが抽出された。属性として導かれた慢性疾患を抱えている子どもの自立とは、「日常生活を送る上で【意思決定】するための力が養われ、様々な経験を通して【病気の受け入れ】をしながら、【病気と共に生きていく】ことができることで、【見通し力】を持って【病気を抱え】ていても自分のありようを決めることができること」と定義した。

【考察】

抽出されたカテゴリー間には相互作用があり、成長発達は全ての時点で常に影響し、同じ内容でも発達段階によってできるレベルや行動の限界に違いがあった。それぞれの発達段階に見合った集団生活や、社会で生きていける自分、意図を持って自分のありようをその都度決められることが大切であると考え。今後の課題として、発達段階別で達成する自立のありようを考えられることと、海外文献の分析や他の学問との比較を行い、より明確な概念を見出すことである。

O1-032

発育における体重変動と肥満・標準・やせなどの体型との関連について

鈴木 美枝子¹、小林 正子²、近藤 洋子¹¹玉川大学教育学部²女子栄養大学 発育健康学研究室

【目的】

学校保健安全法施行規則の一部改正に伴い、児童生徒の発育を評価するには、身長曲線・体重曲線等を積極的に活用することが重要となっている。筆者らは、成長曲線から把握できる身体発育の特徴として体重変動に着目し、体重変動は不定愁訴の有無と関連することを報告している（日本成長学雑誌23(2)、2017）。本研究においては、こうした体重変動の出現が、肥満・標準・やせなどの体型と関連があるのかどうかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

東京都内私立一貫校に在学し、2015年と2016年の4月に在籍した高3生のうち、小1～高3までの身長と体重の計測値がある計133名を分析対象とした。対象者には、明らかな発育異常や慢性疾患を伴うものはいなかった。小1～高3までの身長・体重を小林の「発育グラフソフト」に入力し、作成した個別の成長曲線から思春期以降の大幅な体重変動（2年間でパーセントイル曲線1基準線以上、ただしスパート時期の増加は除く）がある者を体重変動群、それ以外を非体重変動群の2群に分類した。さらに、体型による分類として、高校3年間のうち2年以上、肥満度20%以上の者を肥満群、肥満度-15%以上20%未満の者を標準群、肥満度-15%未満の者をやせ群として3群に分類した。これらの体型による3群間で、体重変動の有無に有意差があるかどうかを検証した。本研究は玉川大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

全体および男女別に検証した結果、いずれも肥満・標準・やせの3群間で、体重変動の有無に有意差はみられなかった。

【考察】

筆者らの研究において、成長曲線から把握できる大幅な体重変動は、不定愁訴と関連のあることが示唆されているが、こうした体重変動が、肥満度から分類した肥満・標準・やせという体型によって、出現しやすさ・しにくさがあるのかどうかを検証した。その結果、体型別による出現率の比較では差がみられず、どの体型でも一定の割合で極端な体重変動が認められた。すなわち、不定愁訴とも関連する体重変動という身体的特徴は、体型によらず出現する可能性があるといえる。これより今後は、一時点の身長や体重から算出した体型によって身体発育を評価するのではなく、成長曲線を用いることにより、その経年変化から捉えることができる体重変動にも注目しながら身体発育を評価し、その背景を読み取ることで、児童生徒の健康に役立てる必要がある。